

## 『脈診』——基礎知識と実践ガイド——

何金森監修 山田勝則著 (東洋学術出版社)

東京中医鍼灸センター 浅川 要



古今、多くの治療家が脈診の重要性を口にしてきた。なかには脈診のみで診断して治療することを提唱してきた治療家も存在するぐらいである。したがって、医学史上で数多くの脈診書が残されてきた。しかし、直接、手にとって脈診を指導するならばともかく、文字表現で他者に伝えようとするのであるから、術者の手の感覚を何かに形容して伝える訳で、筆者にとっては、他者がその脈象をイメージして理解できる最善の比喻を用いたつもりかもしれないが、後世ではますます混乱して、訳がわからなくなるのは必定である。例えば二十八脈の「洪脈」一つをとってみても、「ナイフで竹を削る」「雨が沙にしみこむ」「蚕が桑の葉を食べる」などとそれぞれの脈書が異なった比喻を用いることで、受け手の「洪脈」に対するイメージは各自で食い違ってしまうのではないだろうか。脈診が一人の治療家の病態認識としてのみ存在するならば、問題は生じないのだが、複数の人が治療対象に対して、脈診を通して共通の病態認識をもとうとする場合、要するに医学診断法としての脈診になるためには、誰もが同じ脈としてとらえることができる客観的基準をもたなければならない。

私の場合、それを「浮沈・遲數・虛実・大細」の八脈に求めた。この4対の基本脈象が術者の間で一致していれば、弁証の大綱である「表裏・寒熱・虚実・陰陽」の八綱で食い違うことはないであろうと考えたのである。そのうえで、脈の硬さや脈の来方の不齊など、八脈では表せないものを二十八脈の脈象で示せばいいのではと考え、自分の治療のなかではそのとおりに実践している。

山田勝則氏が記し、何金森氏が監修した『脈診』——基礎知識と実践ガイド——では脈の客観的基準を「不浮不沈」「三部有脈」「不大不小」「不遲不數」「柔和有力」「從容和緩」「節律一致」「尺脈有根」の平脈の8つの特徴に求め、この八脈が正常な人の典型脈

だとし、二十八脈はその偏差であるとしている。例えば脈の強さを表す「柔和有力」の「柔和」に反するものが「弦脈」と「緊脈」であるなどである。そして「柔和」であるべき脈が「弦脈」や「緊脈」になるのは、①肝の疏泄作用の失調、②気血が脈管中に充満、③内外の実寒邪の存在によることであるとその脈理を説明し、したがって「弦脈」の主病は「肝胆病・食滯胃腸・疼痛・痰飲」「緊脈」の主病は「寒証・諸痛」であると、実に系統的に二十八脈の一つひとつを解き明かしてくれる。したがって本書を丹念に読めば、脈診は難解だという先入観をもつことなく、自分の鍼灸治療に脈診を役立てることができるのである。まさに鍼灸臨床に必携の脈書と言ってよい。

私が本書で刮目したのは以上のことだけではない。いままで二十八脈との兼ね合いがはっきりせず、脈状診の別の診方とし、実際には無視していた「神・胃・根」を神は柔和有力、胃は從容和緩、根は尺脈有根として平脈の8つの特徴に組み込んだのである。

本書のなかには私とは意見を異にする部分も多々見られる。例えば先に引用した弦脈にしても私は「弦を張ったようにびんとして長く端直な脈」としており、寸関尺三部すべての指下に感ずる実脈の一脈としてとらえるので、本書が肝陽上亢や肝鬱脾虚のときには「弦細數無力」といった弦で無力の脈が現れると記しているのは、遲數脈が同時に現れることがありえないと同様、矛盾したもののように思えるのだが、如何であろうか？

しかし、数多くの相違点をもっているにも、本書の脈診指南書としての価値はいささかも減ずることはない。むしろ、山田氏が脈診の古典を鵜呑みにすることなく自分の鍼灸治療を通して、例えば「牢脈の不一致」にみられるように、承服できないものは対しては、はっきりと自分の意見を述べている点にこそ、本書の真の価値があるのである。